

## eラーニングの先進的事例調査報告書（案）

平成 25 年 12 月 18 日

様

大学間連携共同教育推進事業  
研究員 小田奈緒美 ㊞

大学間連携共同教育推進事業「愛知県内教員養成高度化支援システムの構築」プロジェクトにおいて、「eラーニングの先進的事例」の視察を行ったので、その結果を下記のとおり報告します。

### 記

1. 調査日時	平成 25 年 12 月 6 日（金）13：00～16：00（3H）
2. 視察先	明治大学 教育支援部ユビキタス教育推進事務室 2052 室、収録教室 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 TEL:03-3296-4458 FAX:03-3296-4525
3. 視察目的	平成 24 年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学間連携共同推進事業—愛知県内教員養成高度化支援システムの構築—」の採択により、国公立の 5 大学が、愛知教員養成コンソーシアムを構成し、事業を実施する。事業の実施にあたり、国内における eラーニング講義を実施する大学を現地視察するとともに、担当者からの情報収集および意見交換を行うことで、5 大学間での eラーニング講義の開講に有効な手法を構築することを目的とした。
4. 視察内容 （調査）	① 受講生の認証およびセキュリティについて ② 受講生の視聴状況について ③ 受講生のサポート体制について ④ システムや配信について ⑤ コンテンツ作成について ⑥ 小テストや評価について ⑦ 著作権について
5. 参加者 （大学別・ 敬称略）	・愛知県立大学 教育福祉学部 教授 木幡洋子 ・愛知淑徳大学 人間情報学部 助教 木幡智子 ・愛知教育大学 大学間連携共同教育推進事業 研究員 小田奈緒美
6. 所見	別添えのとおり

## 目次

視察概要 .....	2
eラーニングの先進的事例調査報告書 .....	3
1 視察内容 .....	3
1.1 視察・インタビュー実施事項 .....	3
1.2 明治大学側出席者 .....	3
1.3 視察者側出席者 .....	3
1.4 視察・インタビュー議事録 .....	4
① 受講生の認証およびセキュリティについて .....	4
② 受講生の聴講状況について .....	5
③ 受講生のサポート体制について .....	6
④ システムや配信について .....	8
⑤ コンテンツ作成について .....	10
⑥ 小テストや評価について .....	13
⑦ 著作権について .....	15

## 視察概要

### ■ 視察経緯

本プロジェクトにおける今年度の事業展開としては、まずは各種資格取得プログラムから取りかかるとして平成 25 年度第 1 回実務者会議にて承認を受けた。特に、学校図書館司書教諭資格は、12 クラス以上の学校では学校図書館司書教諭を置く必要があることから、学校現場では資格取得者のニーズがあることがわかっている。また、現在は 2 年かけて取得する資格を e ラーニングの導入により 1 年に短縮できれば、学生等受講生のニーズを満たすことができる。さらに、学芸員は 19 単位の履修が必要であるが、学校図書館司書教諭は 5 科目 10 単位と取組やすいことから、資格取得プログラムの中でも、学校図書館司書資格取得コンテンツの開発を実施することとした。

そこで、学校図書館司書教諭関連授業を e ラーニングにて実施している先行的な事例を視察するため、e ラーニングのコンテンツ制作および受講生のフォローに専門家を導入していることを、HP にて詳細に説明している明治大学に 6 月末に一度視察を行った。その後、本プロジェクトでも学校図書館司書資格コンテンツ検討 WG を立ち上げ、コンテンツを検討してきた。作業を進める中で、学生のフォロー体制やコンテンツのシステム的な問題などについて、しっかりと把握した上で進めることが効果的であると作業担当者からの意見があり、再度、明治大学にて視察を実施することとした。

### ■ 視察日時

平成 25 年 12 月 6 日（金）13：00～16：00（3H）

### ■ 視察先

視察先は、学内の e ラーニングコンテンツ制作にシステム的に関わっているユビキタス教育推進事務室であり、e ラーニングのコンテンツ作成について意見交換を実施することとした。

### ■ 視察概要

- ・ 学生はコンテンツ視聴の際に ID とパスワード、社会人は生体認証を使用するが、ログインした後に他の人が利用していてもチェックはできない。
- ・ コンテンツの視聴時間よりも質が重要であると考えているため、動画の中にキーワードを 5 分に 1 回入れてちゃんと視聴しているかを確認するための工夫はしていない。
- ・ サポートスタッフとの対面でのミーティングは半期に 1 回関係者全員で行う。
- ・ 学生からのメールは、通常数十件であるが、最終日やテスト前等は何百通と来る。
- ・ 提示のスライド挿入のタイミングは、収録時に教員の手元操作を撮る専用のカメラで撮影しておき、後でスタッフが編集・挿入しているため時間がかかる。
- ・ 小テストの問題作成、回答は担当教員が作成し、履歴・採点も基本は教員が行う。
- ・ 収録はカメラマン、ディレクター、アシスタント、営業さん、インストラクショナルデザイナーと教員の計 6 名で撮影をし、基本通して収録をする。
- ・ 著作権処理スタッフとして、専門のスタッフと 1 名雇い確認している。

# eラーニングの先進的事例調査報告書

作成：木幡智子、小田奈緒美

## 1 視察内容

### 1.1 視察・インタビュー実施事項

3時間強ほど、明治大学におけるeラーニングコンテンツを作成する上での有効な手段に関する質疑応答を実施した。

### 1.2 明治大学側出席者

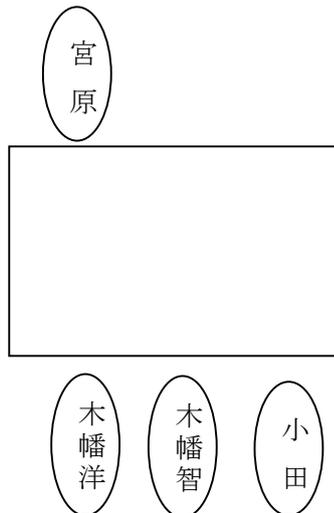
明治大学教育支援部ユビキタス教育推進事務室 事務長：和田格氏、宮原俊之氏

### 1.3 視察者側出席者

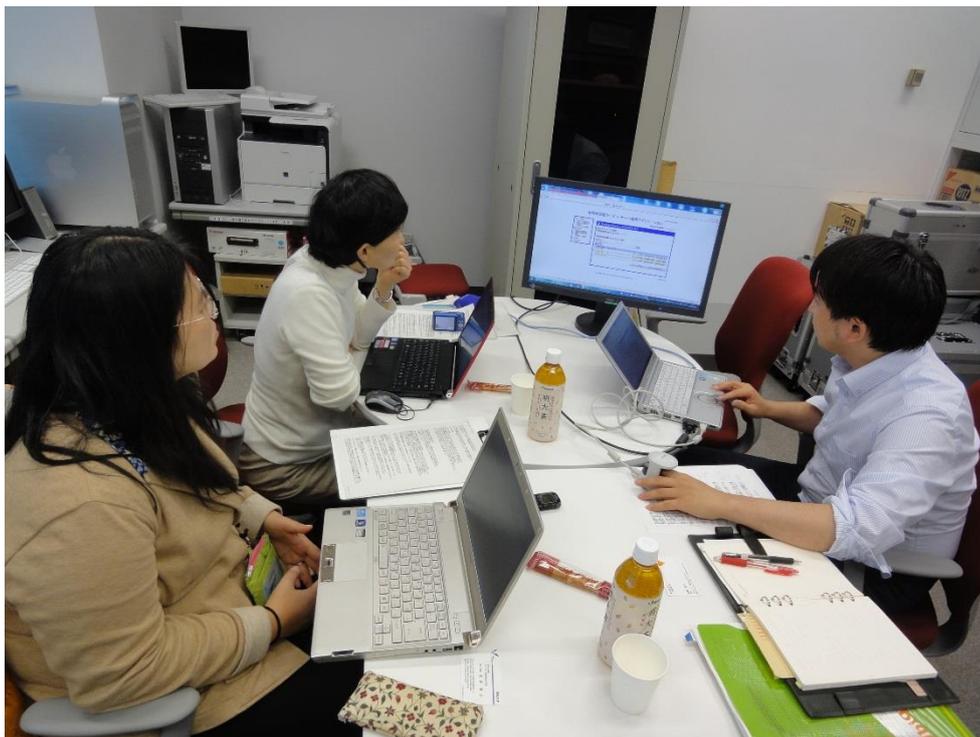
	大学名	職名	氏名
1	愛知県立大学	教授	木幡 洋子
2	桜花学園大学	人間情報学部 助教	木幡 智子
3	愛知教育大学	研究員	小田 奈緒美

\*3 大学 3 名にて実施（敬称略）。

#### 【配置図】



\* 敬称略



視察の様子

#### 1.4 視察・インタビュー議事録

＜今回の視察訪問に際し、愛知県立大学木幡洋子先生より本プロジェクトの進捗状況についてご説明いただき、初訪問の木幡智子先生のご挨拶の後、eラーニングコンテンツ作成に関する質疑応答を行った。＞

##### ① 受講生の認証およびセキュリティについて

- Q. 受講生の特定にかかわることで、司書資格取得講座では、ログインの際に「静脈認証」等があるとのことであるが、司書教諭資格取得の際には、ログインの暗証番号で認証しているのか。
- A. 学部生が学校図書館司書教諭資格を受講する際には、共通認証システムを利用して認証をかけているだけなので、ID とパスワードで対象者を管理・把握しているため、指静脈認証はしていない。一方、司書講習の場合には社会人を対象としており、文部科学省（以下、文科省）から個人認証をしっかりとやれと言われたため、指静脈認証を行っている。その際の静脈認証の機器は貸与している。これらの区分けは、文科省に相談の上、学生はID とパスワード、社会人は生体認証を使用するという事になった。
- 手のひら指紋認証（富士通）は、文科省からNGと言われ、指紋以上の生体認証のもので、一番コストもかからず、認証を取られる側の抵抗が少ないものということで、指静脈認証（日立）にした。メーカーは大体決まっている。

- 費用は、1台 55,000円（補償料込）の他に、システムの導入費用として数百万円程であったが、今は100万円程であると思う。その他、クラウドサービスを行っており、サーバーを自前でもたなくてもよくなった。
  - ログインの方法は、いろいろあり、明治学生の場合、Oh-o! Meiji システム（学生のポータルサイト/Moodle から自前で作っている）から e-Meiji サイト（e-ラーニングサイト）にログインする。
- Q. これまで開講されてきて、受講生の認証に関して、セキュリティ上、問題はないでしょうか。
- A. 結局、指静脈を使用しようが、何を使用しようが、ログインした後に他の人が使えば一緒で、対面でも代返だけしてどこかに行ってしまうこともあるので、なりすましに関しては、最低限のところをカバーしているだけである。ログインした後に他の人が利用していてもそれはチェックできない。文科省は、このやり方で問題ないと言っており、最後の認定のところをしっかりとすれば良いとの判断であった。
- 学部生は通学しているため、大学で必ず顔を見ているから ID とパスワードで良いが、社会人は基本的にはガイダンスと最終試験以外は通学しないため、ID とパスワードだけでない認証をしろと言われたことと、文科省が縦割りで司書講習は生涯教育部局で、学部は高等教育部局と担当が異なるため、担当者によると思う。

## ② 受講生の聴講状況について

- Q. 個々の受講生が積極的に視聴しているか把握するために、視聴中に特定のキー入力を求める等、視聴の履歴の管理も含めて、プログラムに盛り込まれているものもあるが、明治大学さんのシステムでは「個々の視聴が完了している」「視聴中」程度の表示になっているが、どうか。
- A. 学生側からはどれくらい見たかしかわからないが、管理者側からは、何分見たのかを確認することができる。今、動画の中にキーワードを5分に1回入れるなどの工夫をされているが、導入はしていない。この辺りの責任は宮原先生が担当されており、あまり時間で学習を図りたくないと考えている。そこが勝負ではないと考えている。
- しかし、担当されている先生方は、どちらかと言うとちゃんと授業をみて課題をこなして1回分が終わりと考えていらっしゃるのでは、以前は100%コンテンツを見ないと見たと認めないとしていたが、最近は少し緩くなり、現在は全体の75%を見ないと学習したとはみなさないようになった。
  - この辺りについては文科省の担当者と話をした際には、文科省としては、このような資格系のもとは特に時間をちゃんと確保してほしいと言っている。質の方が重要じゃないかという話をすると、日本の大学全体で考えた時に、15回ちゃんと確保しろと言われるように、今は質よりはまずは時間を重要視している。欧米の大学生と比べると、授業以外の1週間に日本の大学生が何時間勉強しているかというのと悲惨で、1日にする

と 30 分もないくらいなので、この状況を変えるために、まずはちゃんと座らせてその時間を勉強させたい。それが定着してきて、予習、復習を学生がちゃんとするようになってきたら始めて必要に応じて質を保証していくように変えていこうと思っているとのことであった。

- ▶ しかし、欧米のインストラクションデザインなどの欧米の教授設計を学ぶと、時間じゃなく質を重視しており、アメリカの大学は全く時間で勝負していないので、5分たったからキーワードを入れなきゃいけないというのはあまり良くないかなと考え、先生の要望に応じて時間は取れるようになっているため、この学生が何分まで見たかどうかはわかるので、その情報を提供して判断してもらうようにしている。
- ▶ eラーニングのメンターさんからは、そういう機能を入れると寝ていたら見ていないことになりますよ、というアイデアはもらうが、わざわざお金をかけてまで導入しようとは思わない。

### ③ 受講生のサポート体制について

- Q. 例えば、同一授業で3本の動画があった場合、2本目の視聴完了から、どれくらいの間が置かれると、3本目の視聴を促すような、メール等での指示がメンター（学習を支援する立場の方々ラーニングコンシェルジュ or チューター）から、何らかの働きがなさるのか。あるいは、一定時間で、すべて最初から（3本あれば、最初の1本目から）視聴を促されるようになるのか。また、そうした学習履歴（視聴履歴）を、評価にどの程度反映されているのか。
- A. 見たか見ていないかを評価には入れておらず、75%以上見ていなければその回は欠席扱いになるだけ。100%見たらプラス10点とか、75%ならプラス7点というような反映はしていない。あくまでも出席なのか欠席なのか判断に使っているだけである。ただ、3回不合格になると最終試験を受けられなくなるという判断になる。全部フルで見たからそれで単位になるということもない。
- Q. サポートスタッフである「ラーニングコンシェルジュ」「チューター」の方々と、学習状況、視聴状況を踏まえての意見交換、情報交換はどの程度なされているのか。
- A. サポートスタッフとの対面でのミーティングは半期に1回である。ラーニングコンシェルジュチューターのほか、コンテンツ制作スタッフ（営業の人も来る）、担当教員、管理委員会などの先生方にも出してもらい、総勢40～50名で半日程話をする。制作側にも、運用側の意見は参考になるため、一緒に話をする機会を設けている。
- ▶ 最初の1時間半くらいは、新しいICTを活用した教育の情報提供として宮原先生などが講演会、1時間は話したいことのある先生が情報共有として話す時間とし、授業をした際の学生の成果物のお披露目などをする。
  - ▶ 最後の2時間がメインであり、サポートスタッフが運用の仕方等について全員が意見を言う時間をとっている。無礼講で大学の批判でも何でも遠慮なく自由に発言さ

せるため、遠慮なく意見を言うため、苦言もかなり出てくるが、サポートの実態を知るためにはよい機会になっている。

- 会議参加者は、今期（2013 後期）はチューター4名、ラーニングコンシェルジュ 2名の6名がサポートスタッフと、教員 10名程、委員会 10名程、制作側スタッフ 15～16名（いくつかの会社に業務委託）である。常駐の事務スタッフは派遣 2名。
- 毎日数十件のメールが受講生からサポートスタッフに来る。情報が見えないところでやりとりされないように、サポートスタッフと学生のメールでのやりとりはラーニングシステムプロデューサーである宮原先生方がチェックをしている。

Q. チューターやラーニングコンシェルジュと学生とのやり取りは、事務スタッフが全て目を通してしているのか。

A. 全てのメール（再視聴や再受験、授業終了日や質問への回答などのお知らせ）が流れるようになってきている。Eラーニングは Web のシステムのため、インターネットを介すと何があるかわからない面もある。例えば、本当に視聴していても「視聴していない」となってしまう場合もあるため、何かあれば申し出るように学生には言っている。

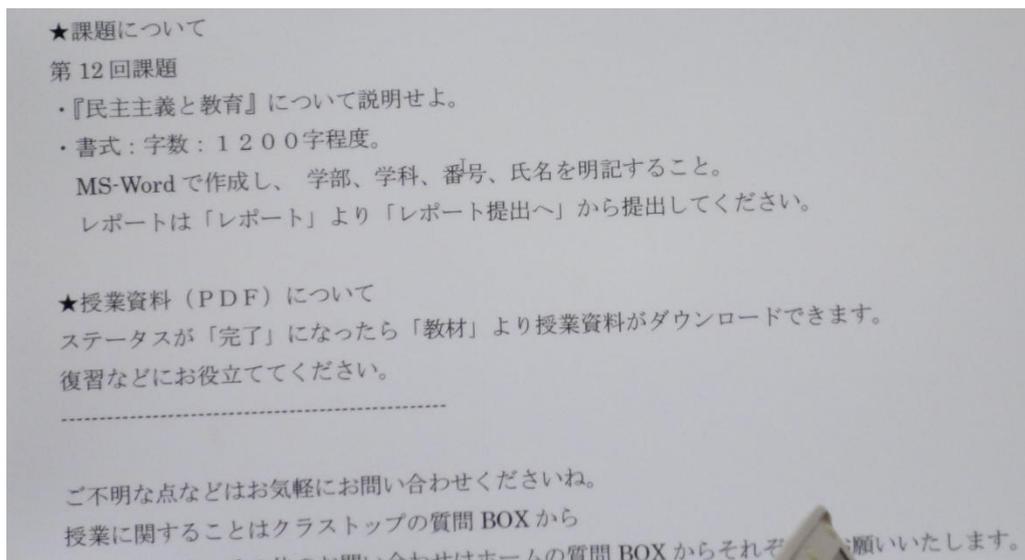
Q. 受講回数や小テストの点数などは自動的にわかるのか。

A. チューターがチェックしており、一覧表で確認できるようになっている。ダウンロードできるファイルがわかりにくいなどの意見をチューターからは言われたこともあるが、システム上の問題で解決できるものとできないものがある。

Q. ラーニングコンシェルジュとチューターとの役割の違いは何か。

A. 学生からの問合せは、基本的にラーニングコンシェルジュ（メンターの役割も現在は担っている）が受ける。困ったときにはカウンセラーも介する。

- 授業に関する質問は、ラーニングコンシェルジュ→チューターに質問があった旨を連絡する。チューターは教員と相談して、ラーニングコンシェルジュを介して回答する場合と、人を介すとわかりにくい場合、チューターから直接回答することもある。
- これらの状況はラーニングシステムプロデューサーが全て管理している。全ての状況を把握している。
- システム上で管理はできるが、見落としが出るため、メールが沢山やりとりされる。明治では、通常の日は数十件であるが、最終日やテスト前等は何百通と来る。
- メールには回答は書かないようにしている。学生はモチベーションが社会人より低いので、ログインする癖を付けさせようとしている。ログインすると、各種お知らせや受講状況などを見る機会につながるため、絶対メールで回答は書かず、ログインして回答を見させるようにしている。
- 文面は学生により変えてはいるが、定型文のメールテンプレートは 20種類くらいあり、適宜変えながらメールでお知らせしている。



ラーニングコンシェルジュからのお知らせメール例

#### ④ システムや配信について

Q. システムは、全て自前で作成しているのか。

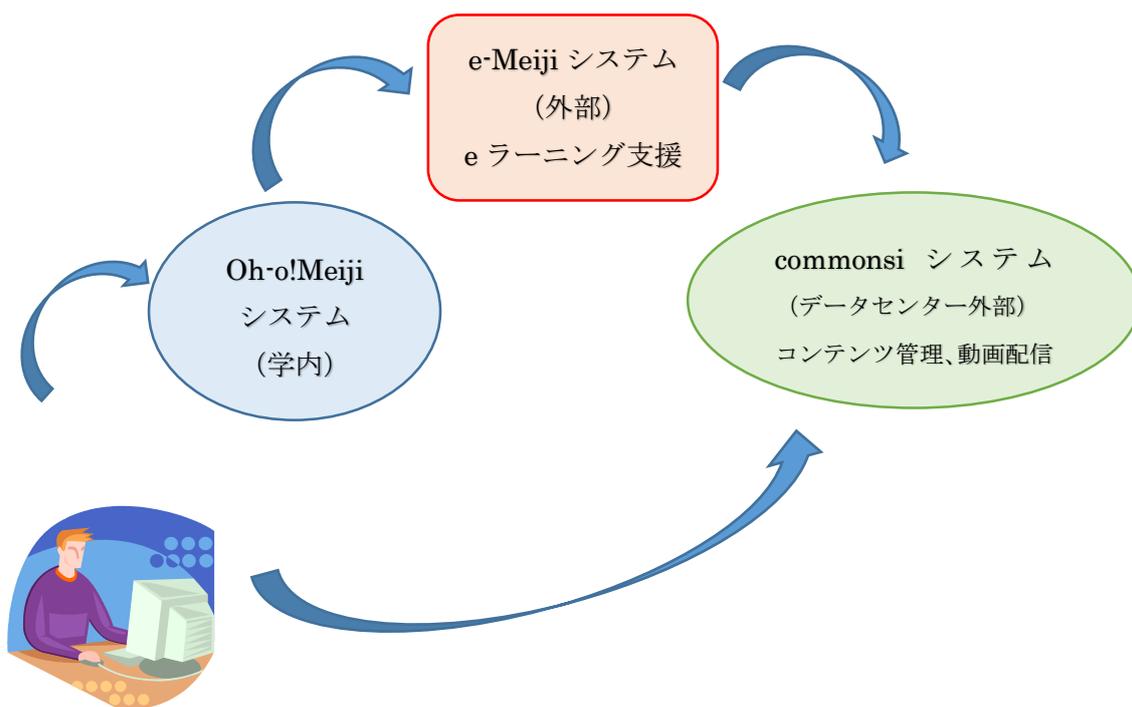
A. そんなことはない。2007年にeラーニングを始めたが、システムが重くなりすぎてしまったため、2013年の春にシステムをリニューアルした。リニューアル前には企業が作っていた既存のパッケージから作りこんでいっていたが、大学には馴染まないところが多く、どんどんカスタマイズしていった。しかし、カスタマイズしすぎて、セキュリティなどのバージョンアップに対応できなくなってしまった。今回はパッケージのバージョンアップに対応できるように、原型をとどめないようなカスタマイズはしていない。

- 他の機能には手を入れず、ガジェット単位でのカスタマイズをするようにしている。
- eラーニングはe-Meijiシステムを使用しているが、その他に、全学的にOh-o! Meijiのシステム（ポータル）も使用して、使い分けているが、e-Meijiシステムと連携しているため、合わせて今年リニューアルした。
- Oh-o! Meijiは管理の面でLMSシステムを搭載していない。Moodle一本だと何か問題があった際に、共倒れになってしまうかもしれないので、違うシステムを使うことにした。
- システムを新しくしてから、システムに関する質問（ActiveXがインストールできない、入っているはずだけどうまく動かない、結局解決しないなど）が減った。Moodleの場合、そのまま利用すると学生には馴染みがなく、使いにくいと思うため、システムの利用法についての質問が多くなる可能性がある。システムに関するサポートの負担が減ったので、変更してよかった。

Q. 運用については、どのようになっているのか。

A. 教育研究に関するものについてはサーバーを置かない方向で動いている。

- 個人情報等、顧問弁護士に確認しながら、外に出せるものは出すようにしてきている。開発業者に外部サーバーの管理もお願いしている。運用ライセンスの契約の中に、適切な運用という点も含まれている。年間ライセンス料はアクセス数によって変化する。
- サーバーを自前で運用するときには構築を外部業者にお願いすることになる。メンテナンスを考えると外に出したほうが楽。600～700万円。データベース使用料等含む。明治大学3万人のうち学生のみだと800～900名が利用。社会人を入れると2000名くらいが利用している。
- 自前でサーバーを立てると、動画の視聴でネットワークの容量を圧迫する可能性もある。何かあった時に対応してもらえるため、セキュリティの問題も、外にある方が危険性は低く、アクセス性が高がる。また、大学の場合法定点検があり、サーバーを止めなければならないという問題も外部の場合には回避できる。



明治大学で使用している3つのシステム

Q. 講義収録配信のソフトは、多くの企業の市販のものがあると思いますが、明治大学のコンテンツ作成は、そうした市販のソフトでしょうか、それとも特注ソフトになるのでしょうか、あるいは、すべて、完全自作になるのでしょうか。

A. できる。2年程前からこのしくみにしており、オーサリングソフトは色々あるが、明治では「Commonsi (コンテンツ管理)」を使用している。これは、e-Meiji と連携してい

る。Video、Producer（その場でリアルタイム録画）、Studio（授業と PPT を後で合わせる）の 3 つの機能がある。

- 動画をスライド単位で追加できるため編集が楽である。詳しい専門家でなく、派遣のスタッフでも UP してもらえる。教員はできないようにしている。ストリーミング配信もしている。
- 対面授業でのコンテンツ作成、学生によるコンテンツ作成にも使われている。
- 学生は Oh-o!Meiji システム（学内）から e-Meiji システム（外部）にアクセスし、commons システム（データセンターは外部）にある動画を視聴することができる。
- 動画配信は、外部のコンテンツ配信会社に依頼しており、通常は LMS にストリーミング機能をつけてそこで動画配信する。
- 46U ラックの高速ネット配信で月 50 万円くらい。
- 明治大学では、学生や教員が使えるライセンスにしている。

#### ⑤ コンテンツ作成について

Q. 例えば、動画の 10 分コンテンツの作成は、10 分の通しでの収録が基本になるのか。

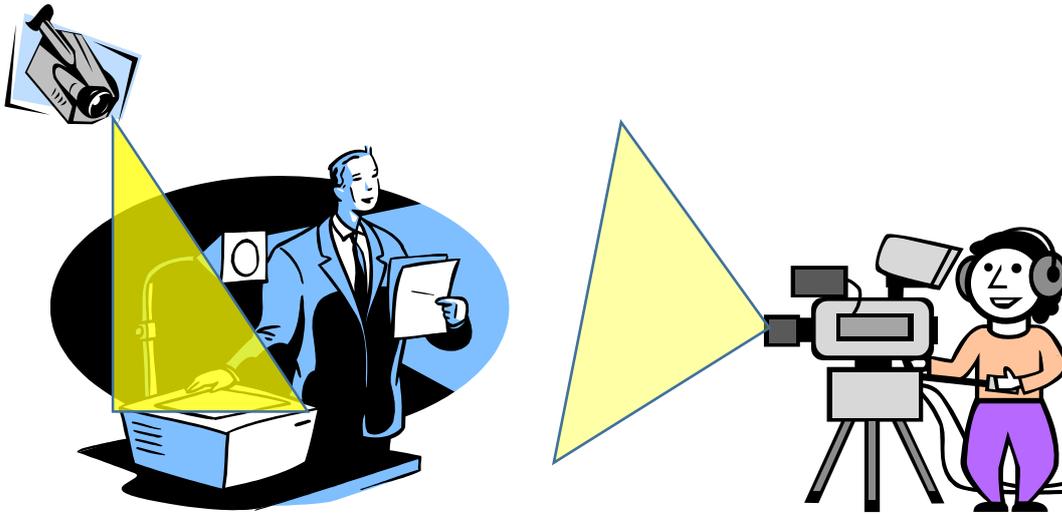
A. 授業コンテンツは基本通しで収録をしている。教員が嫌と言うかどうかによるが、とちりや言い間違いは、音声のみ編集する場合もある。

- 教員から確認をしてもらうことはあまりなく、チューター（司書資格有）が確認をしているため、チューターから相談を受ける形が多い。
- 以前は、教員が OK と言ったものに NG を出すため、伝え方が難しいという問題があり、チューター、教員と宮原先生で話し合い、音のみ、もしくは動画を取り直す場合もあったが、今は、教員もチューターから言われることに慣れたので、直接チューターと教員とでやりとりをすることもある。
- 撮影する際には、色々なことができるソフトを使用しており、音だけ、動画だけを編集することができる。

Q. 提示のスライド操作（変更、強調等）は、メイン教師が講義をしながら行っているのか。

A. 教員による。収録しながら教員が操作はしているが、画面と合わせているのは自動じゃない方が多く、教員は押してはいるが、実際のスライドとはリンクしていない。後で合わせている。

- 時間が非常にかかるところが難点である。
- 後で教員の顔の映像と PPT スライドをあわせるため、カメラは 2 台使用し、1 台は教員を正面から撮り、もう 1 台は教員のスライドを操作する手元を撮っている。



収録の様子とカメラ（2点）配置図

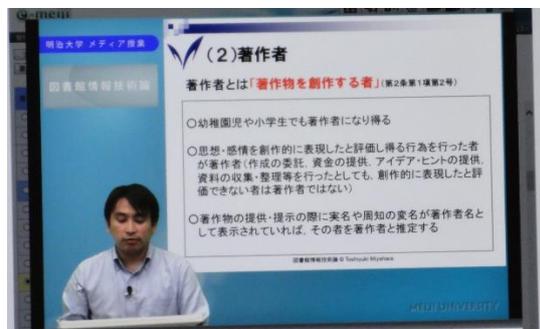
Q. スライドと講師動画のサイズ変更は一切できないのか。内容によっては、実物資料を講師が提示しているところは、学習視聴者としては、拡大して視聴したいと思う。

A. 比率を変えることはできない。画面いっぱいに出したりすることができる。

- シルバーライトというソフトなどでは技術的にはできると思うが、明治では使っていない。



スライドなしの映像



スライドありの映像



編集ソフトによるコマ割の画面

- Q. コンテンツは、毎年作るわけではなく、どのくらいで改訂をされているのか。
- A. 3～5年でコンテンツを改訂する。限界は5年と伝えている。歴史などは長く使えるが、法律や司書教諭などは変わりやすいため、その都度改定をしている。今回は、2012年のリニューアルのときに全面改定したため、3年程作ると思う。
- 社会人は、最新の事例がみられるかと思ったけど少し古くて残念だったというような意見があったりするが、毎年改定するとなると教員にも受け入れられないため、あまり推奨していないが、別ファイルとして最新の内容を提示するということもある。その場合、次の年は改訂することになっている。
  - 最初は、15回の収録で1週間かかるので、教員の反発もあるため、撮り直しは1日できるくらいにしている。制作コストがかかるところは問題であるが、少しの改訂であれば業者に出さなくても、内容と時間により学内でやってしまうこともある。
- Q. インストラクショナルデザインは、デザイナーと教員とが考えて作成しているのか。
- A. やっているが、割とデザイナーさんは気が強く、教員とぶつかりやすいため、間にリエゾンさん（ある程度教育的にわかる人）を経由して直接話をしなくても良いようにしている。ただし、撮影の時には来る。
- 教員とリエゾンさんとのやりとりは、最初に顔を合わせてミーティングをするが、後はメールベースで教員の教材の進行に合わせて進めていく。1週間続けてやると精神的にも大変なため、初めての教員は1日1コマ、慣れてきた教員には1日3コマを限度としている。
  - 15回分作るとすると、最低でも収録だけで5日間かかるが、連続では大変なため、休みの期間であっても2日撮影したら2日休みなどのスケジュールで進めている。授業期間中の撮影は、週1回程度で実施している。
- Q. 教員は、対面でやったことのある授業をeラーニングで別に作らないといけませんが、作り方のルールなどはあるか。
- A. 1回、対面授業（90分）を撮る⇒それをeラーニング化すると60分くらいにしかならない。その間を埋めるものとして、学生の理解を促すものを、情報過多にならないように入れてもらう。
- 対面授業に活かせるところもあり、対面授業も変わったとの声も聞けるようになった。改訂の際には、1回全部作ってみて、それをもとにディスカッションのうえ、改訂していく。最大限、教員のやり方を尊重し、迷っている部分については相談してもらい、あまり口は出さないようにしている。
  - 改訂の頻度についても最初に教員に確認するが、3年くらいたつと撮り直したいと教員から声をかけられることが多い。
- Q. 収録・撮影は15回を1週間程で作成されるとのことであるが、スタッフはどの程度いるのか。
- A. 制作は業務委託しているため、委託企業が来てやっている。学研さんだと、3名～5名

(技術系のカメラマン、ディレクター、アシスタントの3名と営業さん1名、インストラクショナルデザイナー1名)と教員の計6名で撮影を行う。

- ▶ 教員とカメラマンは収録室におり、ディレクターとアシスタントは外の部屋にいる。言い間違いはディレクタさんがチェックしてくれ、映像のプロとしてのコメントがもらえる。アシスタントは照明や雑用をしている。最低2名は撮影スタッフとして必要。

Q. 編集には、どのくらいの期間がかかるのか。

A. 実際の時間(60分)程はかかる。慣れてくればもう少し早くなるが、確認なども入れると大体実時間かかる。業者の人も Commonsi には ID とパスワードで使えるため、編集はスタッフが行う。教員は最後に確認する。

- ▶ システムの導入費用(ハードと4年間のライセンス込)数千万円。その後、年約数百万かかる。

## ⑥ 小テストや評価について

Q. 小テストのオーサリング(問題作成、回答、その履歴、採点等の役割分担)について

A. 小テストの問題作成、回答は担当教員が作成する。履歴・採点についても基本は教員が行う。レポートは教員が採点する。その他の人にやってもらったことはあるが、結局教員に確認しないといけなくなったため、教員が行うことになった。

- ▶ 人数の少ない科目はレポート、人数の多い科目は採点が見きれないため、小テストになっている。問題について20個くらいの選択肢を作るなど、問題作成に工夫をしている教員もいる。
- ▶ 解答は公開していない。間違えた問題だけ個別に教えている。用意されている問題数が限られているため、公開していない。
- ▶ 学生からは回答を全て知りたいという要望があるが、公表という形にしておき、回答は言わないという対応もある。

Q. 最初、評価を拝見した時に、期末試験のウェイトが高いと思ったのですが、その期末試験の受講資格として、小テストを核にした授業受講のいわば平常点が位置づけられていることがわかりました。正直、期末テストのウェイトを他に分散しても(1, 2割)と思いますが、そうした評価についての学内議論は特になかったか。

A. ウェイトについては各教員に任せている。eラーニングでやる場合の望ましい形は、15回のアクセスメントをクリアして目標値に達したかを最後にチェックすることだと思うが、そこまではしていない。毎回の動画視聴および小テストかレポート+最後に対面のペーパーテストを全てクリアして合格にしている。対面とは違うため、ウェイトは難しい。課題を出したときとかには、評価をしてあげないといけなかなと思う。

- ▶ 小テストは基本的には自動採点である。その後チューターがチェックする。合格者には合格の通知はしない。どこが間違ったかはわからないが、点数の結果は受講生が確

認できる。各設問の○×は出ているので、わかるようになっている。間違っ  
て低くなるのは防ぐようにチェックしている。

- 間違いがあった際には、自分から言ってくるように声をかけている。学生  
の質問は、システムから行う。
- 緊急性の高いものはメールで連絡するが、それ以外（課題が出ているなど  
のお知らせ）はシステムに明記される。これらは、チューター（司書資格有）  
が作ってくれている。
- チューターさんは大学が雇用しておらず、内田洋行に委託している。内  
田人材開発センター（教育人材派遣）の管轄である。後期は8科目でこの履  
修者数でいくらという形にしており、千数百円/時間位だと思う。
- 当初は大学教員から紹介してもらっていたが、毎年見つけるのは大変な  
ため、今は司書講習を受講した人に内田洋行からサポート業務を行いま  
せんかというお知らせを入れてもらうようにしている。合格通知を送る際  
に、チラシを1枚入れてもらう。今やってもらっている方は、3年程やっ  
てくれている。
- 資格課程の助手の方の業務に入れられないかという話もあったが、管  
轄が違い、人員の管理ができないという問題がありやめた。

Q. 今後、対面授業がメディア授業になっていく場合、評価基準は、個々の  
科目毎に決めることができるのか、明治大学としてのガイドラインがある  
のか。

A. できる。基本的には、対面授業と同じ教え方ではわからないため、シ  
ラバスの書き方や評価基準も対面授業とは別に設けている。

- 教材が独立しているかどうかということ e ラーニングでは気を付けない  
といけない。学生の疑問をコンテンツ内で解決しないといけない。対面授  
業は、学生の顔で判断することができるが、e ラーニングはできないの  
で、わからないとやめてしまうこともあるので、しっかりと教える範囲を  
決めなければならない。
- 最初にチェックテストを作って内容を作っていく。中身から作り、チェ  
ックテストを作ると、目的がぶれるため、各回の目標を定め、小テスト  
や課題を最初に作る。ただし、情報過多になりすぎないように見極めが  
必要。「～をやってみましょう」というのは、目標ではない。授業の開  
始のときに何ができるようになるのか、何がこの授業から得られるの  
か、学習者の到達地点を言うようにする。
- 今、教授者により相互評価、相互レビューをする報告でやっていきたく  
と考えている（相互視聴と議論）。自分のコンテンツだけでなく、他の先  
生のコンテンツも見ることができれば、効果的だと思う。
- 司書でやっている演習科目を e ラーニング化しようということを今進め  
ている。内田洋行が毎年いろいろな報告書を出してくる。履修状況報告  
（各科目の小テストの平均点等）を見て、毎年小テストで平均点の低い  
ところについては、たまたまではなくその部分については教え方が悪い  
ことが考えられるため、その部分については教員にフィードバックし、  
教材を変更してもらうこともある。

## ⑦ 著作権について

- Q. 著作権については、どのようにしているのか。現在、非常勤講師のみであるが、コンテンツの管理は大学がやるか、教員がやるのか。
- A. 著作権は全て処理する。明治は特異である。一般的な著作権の専門家の意見としては、大学のお金で e ラーニングのコンテンツを作った場合には、教員の著作物となるという。しかし、明治では PPT などの素材自体は教員の著作物なので、学会などで使ってもらってもいいが、コンテンツとして出来上がったものに関しては大学の著作物としている。
- 教員がうそをついて違法の著作物を使っていた場合に訴えられた時には、教員の著作物である場合には大学は守らないが、大学の著作物であれば、大学に守る義務があるため、大学として責任をもって裁判を闘うとは伝えている。
  - 質の保証のために変更の際には協議に応じるというような細かい規定は盛り込んでいない。E ラーニングの場合は特に質の保証は、教員と大学の判断がそれぞれあり、教員だけで学習を成り立たせることができないため、組織として質の保証をするというスタイルをとっている。
  - 対面授業は教室さえあれば 1 人できるが、e ラーニングはコンテンツを作る際にも、授業を行う際にも 1 人で成り立っているわけではないので、教員 1 人だけの著作物とは厳密には言えない面もある。
  - 改訂の際には謝金はでない。その程度のサイクルで改訂を考えているかを最初に話をする。3~5 年を改訂の目安としているが、もし教育的目的を達することができるのであれば、10 年 20 年使用しても良いと思う。
- Q. 著作権の処理は、誰がやってしているのか。
- A. 危ないものリスト（引用にするか、著作権処理するか、やめてしまうか）を業者につくってもらい、処理は大学の著作権専門のスタッフがする。特定多数への公衆送信にあたるので、著作権処理をするようにしている。
- 著作権専門のスタッフが 1 名おり、ユビキタス事務室で雇った。個別に著作権者とやり取りするには時間がかかるため、法律の勉強をしていた方が派遣会社に声をかけたらいだったので、その方をお願いした。
  - 著作権専門のスタッフが動くのは、コンテンツが出来上がってからではなく、リストができたらずぐに取りかかる。当初は専門的にやると全部ダメと言われたが、それだと進まないため、宮原先生の判断などで仕分けていたが、1 年程やっていると慣れてきた。
  - AP 通信のワールドアカデミックアーカイブと契約しており、学術的なものに関しては、使えるようになっている。オバマ大統領の写真とかも使える。

以上